

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 11 月 21 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程(5年一貫制)学生
氏名	大塚亮真
1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
IPS2018 への参加/ケニアの国立公園ツアー/フィールド調査：ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園におけるマウンテンゴリラの住民参加型保全とエコツーリズムの持続可能性に関する研究	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 30 年 8 月 17 日 ~ 平成 30 年 11 月 4 日 (80 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
Conservation Through Public Health, Dr. Gladys Kalema-Zikusoka	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<input type="checkbox"/> 今回の渡航の概要 <p>今回の渡航ではケニアとウガンダの 2 か国に渡航した。私はまず 2018 年 8 月 17 日から 8 月 29 日までケニアにて、International Primatological Society Congress 2018 in Kenya に参加してポスター発表をしたあと、PWS 履修生の峠さん(L3)、横塚さん(L5)とともにケニアの国立公園ツアーに参加した。その後 8 月 30 日にケニアからウガンダに入り数日間カンパラに滞在したのち、9 月 3 日から 10 月 31 日までの期間、ブウィンディ原生国立公園にてフィールド調査を実施した。調査終了後、11 月 1 日と 2 日はカンパラ市内に滞在して今後の調査のための準備をして、11 月 3 日発の便でエンテベからドバイ経由で日本に帰国した。</p>	
<input type="checkbox"/> 調査等実施の状況とその成果 <p>1. International Primatological Society Congress 2018 in Kenya (IPS 2018)への参加</p> <p>私にとって初めての国際霊長類学会だったが、刺激的で興味深い発表が数多くあり、どの発表を聞か取舍選択するのがひじょうに難しいほどであった。ポスター発表にはたくさんの方々が発表を聞きに来てくださり、貴重な議論を交わすことができた。ルワンダでマウンテンゴリラの研究をしている Karisoke Research Center の方々とも交流し、それぞれの調査地における最新情報を共有したり、研究について議論したりできたことも大きな収穫のひとつであった。</p> <p>レクリエーションのひとつとしてサッカーのトーナメントが開催された。私は小中高と野球部であったが趣味でサッカーやフットサルをやっているため、副キャプテンに立候補し、実質的にチームの運営(フォーメーション、スタメンの決定や戦術の共有と確認、練習、試合の準備など)を担った。1 試合目は New World Monkey Team と対戦し 2-1 で見事に勝利を収めた。決勝戦では、初戦で南米代表とも言っても過言ではない Old World Monkey Team を破った Prosimians Team と対戦したが 3-0 で快勝し、“FIPA”ワールドカップを掴み取った。</p>	
<p>写真(必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p>	
<p><平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org</p>	

2. ケニアの国立公園訪問ツアー

最初に訪問した Amboseri 国立公園では、ゾウとの遭遇率が高いという前評判通り、宿に向かう前からいきなりゾウたちが私たちを迎えてくれた。夕方のサファリに出たときは、ゾウの群れが、我々の車を含む数台のサファリカーのすぐ近くを、何事もなかったかのように通り過ぎていったのが印象的であった。しかし、残念ながら曇天で、キリマンジャロをはっきり見るができなかったのが心残りであった。次に訪れた Masa-Mara 野生動物保護区では、ドライバーたちが車に搭載した無線機を使用して、情報を逐一共有し、ライオンやヒョウなどゲームドライブの目玉ともいえる動物を誰かが発見すると、すぐその場所に多数の車が集まってくるようになっていた。我々が早朝にライオンを見に行った時には、すでに数 10 台のサファリカーがライオンを取り囲んでおり、後から続々とサファリカーがやってきた。しかし、ライオンたちは特に気にするようなそぶりも見せず、悠々と食事を楽しんでいた。次に我々がチーターを見た時も、ヒョウを見た時も状況は同じであった。私の調査地のブウィンディではゴリラが人に慣れ過ぎてしまっていることによってしばしば問題が生じることがあるが、Amboseri でも Masai-Mara でも動物たちは車にとっても慣れていた。

マサイの村を訪問した際に興味深かったのは、帰り際に、村を案内してくれたマサイの若者たちがネックレスやブレスレットなどの装飾品の販売を始めてきたときに、ライオンやヒョウの牙を売ろうとしてきたことだ。本人たちは、マサイの人々は今も伝統的な狩猟を許可されており、これらは本物の牙だと言い張っていたが、おそらくあの装飾品に使用されていたのはライオンやヒョウのものではなく、犬のものではないかと推察される。仮に本当にライオンのものだったとしても、マサイの人々が今でも伝統的な狩りを許可されているという話は信用できなかった。ケニアでレンジャーや関係者に裏を取ることはできなかったので、マサイの人々と国立公園、観光産業との関係についてもっと勉強してみようと思える良いきっかけとなった。

3. ブウィンディ原生国立公園におけるマウンテンゴリラのストレスホルモン研究

本調査の目的はマウンテンゴリラのストレスレベルに影響を与える要因が何かを把握し、さらに観光の実施や人付け等をはじめとした人間とゴリラのインターアクションがゴリラのストレスレベルに与える影響を評価することである。合計 48 日間ゴリラを追跡し、ネストとトレイルから新鮮な糞サンプルを非侵略的な方法で採取した。対象とした群れは、人付けされてから長い年数が経っている Rushegura group と Mubare group、そして 2018 年 7 月から新たに観光にオープンされた Katwe group の 3 群である。トレイルからのサンプルは筆者または UWA のトラックによって個体識別をしたうえで採取した。サンプルは採取後すぐにアイスボックスに入れてキャンプに戻って抽出作業を開始するまで低温に保った。キャンプに戻ったあと、サンプル採取後 5-11 時間以内に CTPH のフィールドラボにて 1.00 g のサンプルを 8.0 ml の 90 % エタノール入りの 25 ml チューブに入れ、手で 5 分間水平に振って抽出した。抽出後、40 分間静置したのち上澄みを 0.8 ml とり 2.0 ml チューブに移し、暗所常温で乾燥させた。

各群れを訪れた毎日の観光客数、気温と湿度、郡内における攻撃的な行動、群間のインターアクション、ケガの有無などゴリラのストレスレベルに影響を与えうるデータも収集した。これらの変数は GLMM (一般化線形モデル) を用いたデータ解析の際に固定効果として用いる予定である。なお、ランダム効果にはゴリラの個体 ID を用いる。

今回の調査期間中に採取したサンプル数は合計 478 サンプル (ネスト 119 サンプル、トレイル 290 サンプル、実験 69 サンプル) である。なお、UWA (Uganda Wildlife Authority) と MTA (Material Transfer Agreement) を締結し、UNCST (Uganda National Council for Science and Technology) から発行された輸出許可証をもって正式にサンプルを日本へ持ち帰った。11 月下旬から WRC (京都大学野生動物研究センター) にて木下こづえ博士の指導のもと EIA を用いて採取したサンプルに含まれる糞中糖質コルチコイド代謝物の濃度を測定する予定である。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真1. IPS Kenya の会場前にて



写真2. 決勝戦後の集合写真



写真3. 優勝トロフィーを持って



写真4. 車にむかってくるゾウたち1 (Amboseri)



写真5. 車にむかってくるゾウたち2 (Amboseri)



写真6. 狩りを終えたばかりのライオンたち (Masai-Mara)



写真7. チーターを囲むサファリカー



写真8. 幸運にも出会うことができたヒョウ (Masai-Mara)



写真9. ヒョウも車に慣れている (Masai-Mara)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真10. 村を案内してくれたマサイの若者たち



写真11. 調査地の風景をタイムラプス撮影



写真12. お母さんの背中であたり



写真13. 背中が白くなり始めたBB。口周りの傷が治る。



写真14. レンガをなめて唇が赤く染まるJuv



写真15. 新しく人付けされたK群れのSAd



写真16. 眼差しが印象的なAdFB



写真17. 父の背中をグルーミング

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真18. 木の上で休息するSB



写真19. 母を呼ぶInf



写真20. 行方不明になっていたAdFと再開



写真21. 休息するBB

6. その他 (特記事項など)

本フィールド調査は PWS と JSPS (日本学術振興会) の支援のもと実施することができました。研究受入機関である CTPH(Conservation Through Public Health)、そして調査許可と糞サンプルの輸出許可を与えてくださった UWA (Uganda Wildlife Authority)、UNCST (Uganda National Council for Science and Technology) に心より感謝申し上げます。